
異世界のバスストップ

コスモス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界のバスストップ

【Nコード】

N4549Z

【作者名】

コスモス

【あらすじ】

通学バスを降りたらそこは異世界でした。

異世界を救うために呼び出された少年の異世界冒険の旅。

しかし、背が低く、それでいて超美形である少年は、日頃から美少女に間違えられ、いろいろ気苦労が絶えません。

更に女難の相もあって・・・

前作同様に、ちよっぴりエッチでチートです。

1 プロローグ的な何か（前書き）

ええつと・・・前作「押し入れの異世界」を応援して下さいました皆様
に心からお礼を申し上げます。前作はざっと3週間ほどで書き上げ、
後は予約投稿しましたが、正直しんどかったです。なので、今後は一
話ずつにさせてくださいまし！お願い！

フラグとか設定とか、その他もろもろぶっちぎって、心の赴くまま、
気の向くまま、お気付きの方もいらっしやるようですが、プロット
？何それ、おいしいの？という状態で妄想オンリーで書いています
のでご容赦を。

この作品も気に入っていただけたら幸いです。

1 プロローグ的な何か

いつもの朝、いつもの通学路、いつものバス停。

でも、降りたのは、いつもの学校前のバス停ではなく・・・見上げるような巨木が乱立する森の中。

ん？

実際に見上げる僕の後ろで、古めかしいディーゼル音も高らかに排ガスをまき散らしつつバスは去って行く。

「おやあああ？」

声を出して疑問を提示して見ても応える者は無く、ふと見たバス停の標識には・・・

『異世界・狭間の停留所』

成るほど・・・つまり、降りるバス停を間違えた。ならば次のバスを待つて・・・ハイ？

時刻表はある。あるにはあるが・・・「3年後」ってなに？

これは、時刻表と云えるのか？ならば、バス会社に連絡して苦情を・・・ピュン！メキ！

バス会社の電話番号を探そうと少しばかり屈みこんだその頭上を、突風が吹き抜け、標識の上部が芸術的なまでに高速で回転しつつ森の奥に消えていく。

ふあああああ！！！！

とでも叫ぶべきか？ゴルフ場なら。

律義に標識の上部が飛んで行った方を見送ってから振り返ると、そ

ここにはでっかい灰色の熊？のような生き物がいて、目測、高さ3・5メートルの高みから、つぶらな瞳を憎悪に赤く燃やして僕を見つめていた。

「そんなに見つめちゃ・・・イヤ！」

結論、この熊もどきにはジョークは通用しないらしい。

おかしいなあ、両手を顎の下にグーで添え、潤んだ瞳で上目使い。完璧の筈だ。

他校の不良とそっちの趣味の男子学生に云い寄られた時は、これで一撃だったのだが。

これが効かないとなると・・・

ふむ。目の前の上部を失った金属製のバスの標識が、ざっと1分後の僕の未来予想図か。

これはもしかして、噂に聞く『絶体絶命のピンチ』ってやつですか？森の中のバス停に熊の様な巨大生物とくれば、某アニメの心優しき未確認生命体を期待したいのだが、違うらしい。

よろしい・・・ならば戦争だ。

熊もどきが“ぐおおッ！”と唸り声を上げながら両手を振り上げ、その右手が僕の左顔面を捕らえる前に、軽く屈んで一歩前進。あっさり凶悪な爪の一撃が空を切った。身長差があり過ぎて、至近距離に間合いを詰めれば熊もどきには死角が多い。

懐に潜り込んだ勢いを殺さないように、左足を軸に腰を捻りつつ熊もどきの右膝の関節に向かって、水平に右の回し蹴りを“そいッ！”と叩きこむ。

関節がある生き物の弱点は、関節と相場が決まっているので、やってみたが・・・

べきいいいん！

あっさり変な方向にへし折れたところに数百キロの体重が押し掛かり、右膝が潰れる。

当然、二本脚で立ち上がっていた熊もどきは“うごおおお！”と多分悲鳴を上げながらバランスを崩して右に倒れ掛る。

次に、前に出ていた右足を軸に、倒れこむ熊もどきの顔面に、カウンターで左回し蹴りを“ていッ！”と叩きこむ。僕の黒のスニーカーが熊もどきの顔面にめり込むのが見えた。

グシャごきいいいん！

続けて頭部に接近して右の打ち降ろしで止めを・・・と思ったのだが、熊もどきはそのまま“ずずううん！”と地響きを立てて倒れ伏してしまった。

あれ？

なるほど。

この熊もどきは、骨粗鬆症だったのですね？

しかも、非力な人間の蹴り二発で死んでしまうほどの重症だったとは、不憫です。

僕以外のもっと弱い小動物なら、もしかしたらカルシウムを補給できていたかもしれないのに。

せめて最後は森の王者として戦って死ねたことが救いでしよう。

そういうことにおいてください。動物愛護団体に叱られますからね。

もう戦うこともなく、安らかに永眠した森の王者に、暫しの黙禱を捧げ、僕は、改めて周囲を観察することにした。

まず目に入るのは巨木の森。奥が見えないのでパス。

そして、その森を突き抜ける一本の砂利道と、半壊したバス停の標識。

念のためバス会社の電話番号が無いか調べてはみたものの、ある意味予想どおり、そんな記載はなく、あつたとしても携帯は圏外だったとさ。

あとは森の王者の死体が一つ。

もし現状が、遭難の一種なら・・・じゅるり・・・食料の確保は重要だ。

しかし、僕に熊を解体するスキルはないし、そのための道具も無い。諦められるしかないようだ。

では、次善の策として、道があるのだから歩いてみよう。

取り敢えず、バスが走り去った方向に向かって。

なんでそっちか？

変人の伯父が“倒れるときは前のめりに倒れる”と云っていたので、兔に角前進。

この伯父は兔に角変人だ。

一応、自営業らしいが、夏休みに遊びに行くと、日がな一日自宅にいて、小難しい法律書を読み漁っているかと思えば、いつの間にか僕でも読まないような卑猥なライトノベルを読みふけている。

本人曰く、仕事の合間の気分転換に“マンガとライトノベルは最高”なんだそうだが、僕が見るに、気分転換の合間に仕事をしているのではないかと思う。

さて、変人の伯父のことは置いて・・・

バス停の近くに落とした通学カバンを拾い、トボトボと歩き出す。

通学カバンには、非常に幸いなことに、お弁当が入っている。

と云っても、少し大き目の鮭と梅干のおにぎりが二つだけだが、ラップに包んで、100均で購入した、おにぎり入れの容器二つに収まって、僕に食されるのを待っている。

時間は午前8時45分

取り敢えず、遅刻だな。

1 プロローグ的な何か（後書き）

この作品を書く前に、頑張って三人称で書き始めた小説は、2作。それぞれ2話、4話程度書いて、「つまらん！」という結論に達したため、またまた一人称でこんな感じになりました。

ちなみに、題名のバストップは、よほどのことがない限り出てきません。

多分、おそらく、出てこないんじゃないかなあ？

行き先不明な物語に、題名つけるのは無理です。

2 第一村人？発見的なごたごた

森の王者との壮絶な戦いから二時間が経過。

僕は相変わらず巨木の森の中を道なりに歩いている。人の歩行速度が毎時4キロから5キロとして、僕なら、もう10キロ以上歩いている筈だが、全く人の気配がない。

少し期待していたけど、次のバス停も発見できなかった。

途中、森の王者二号とか三号とかが出て来る可能性に気付いて、道端に落ちていた木の枝を拾い、不要な枝を落として一応の武器としたが、見た目は樫の木に似て頑丈そうなのに、やけに軽い。無いよりはマシといった程度だ。

兎に角、拾った棒きれを杖のようにして歩き続けるしかない。

歌でも歌うか？

一瞬、脳裏に浮かんだフレーズは・・・止めとこう！また熊もどきが出てきそうだ。

森の王者二号が、一号と同様に骨粗鬆症である可能性は極めて低いだろう。

「だ・・・だれか・・・」

お昼前、今日も無事登校していれば、クラスメイトの何人かが、チャイムと同時に購買部に向かってダッシュするためのウォーミングアップを始める時間。

掠れた女性の声が聞こえた。

声のした方に慌てて駆け寄ると、銀色の西洋甲冑のようなものを身に付けた女性が、道の傍に倒れていた。

取り敢えず抱き上げて・・・軽ッ！
道の上に引き上げて寝かせると、金髪の外国人女性であることが解
かった。

ぶうううん・・・

蚊か蠅が耳元で飛びまわる音がしたので、右手で払って見たら“パ
シ”と偶然、何かを掴んでいた。

おお！弓矢ですねえ・・・て、あれ？

その後も同じ音がして、数本の弓矢が飛来したが、全部迎撃に成功。
弓矢って、速度遅くて普通に見えるし、結構、手で掴めるんだなあ
と妙に感心していると、矢が飛来した方の森から、何かが三つ高速
で近づいてくるのが見えた。

うち一つは、通常の三倍の速度で・・・
だが、残念なことに、赤くはなかった。赤くはなかったが・・・な
にそれ？

「嬢ちゃん、何者かは知らんが、おとなしくその女を此方によこし
な」

先頭の男？がそう云った時には、僕は後から来た別の男？二人に囲
まれていた。

「あ、いいですよ」

女性の傍らに立って僕は答えた。

今のところ、僕にはこの女性を助ける義理は無い。

そもそも、この女性が殺人鬼で、目の前の男？が公的機関の職員で
ある可能性もあるのだ。

伯父が云ってた・・・人を見た目だけで判断してはいけないと。

例えそれが“獣人”であつてもだが、声と体格と服装からして、目の前の人は多分男だ。

もし、女だったら・・・伯父が知ったら、自らの命を絶ちかねないな。明らかに毛深い狼顔で、長く突き出した鼻にギラリと光る長い牙がある。可愛くないのだ。

頭の犬耳も台無し・・・夢も希望もない。

「ほお、随分素直だな？ベックの弓を払い除けた割にはよ」

「そうですか？褒めてもオナラもでませんよ？」

後ろの一人、弓を肩に掛けた獣人さんが近寄つてきて、倒れたままの女性に手を掛けた所で、僕は持っていた棒を振り向きざまに、その胸めがけてフルスイングした。

ゴキッ！という音と共に、多分ベックさんは5メートル程吹き飛んで動かなくなった。

伯父が云うには、獣人は頑丈だし回復力も凄いから大丈夫だろう・・・多分。

「てめえ！何のつもりだ！！！」

「何のつもり」って、そりゃあ、ついさっき命を狙われたんですから、その犯人の処分をするのは当たり前でしょ？」

僕には、この女性と獣人さん達の関係をどうこうするつもりはないけれど、弓で殺されかけたのは事実なので。“それはそれ、これはこれ”と云うことだ。

何処がおかしいですか？

それに僕は結構伯父が好きだから、伯父の夢と希望を守るため、こ

ここで獣人さん達には、是非、消えて貰いたい、無かった事にして貰いたい。

いけない！僕の願望が少し混じって・・・毒さているなあ・・・

「そうかい？じゃあ、悪いが嬢ちゃんにも死んでもらうぜ！？」

一番えらそうな獣人は、赤い服も着ていないのに通常の三倍の速度で動き、あっという間に僕の間合いに入ったかと思うと、いつの間にか背中に担いでいた長剣を抜いて、ニヤリと笑って斬りかかっていた。

僕は、そのニヤリにムツときて、眼前で振り上げられた長剣が高速で振りおろされる前に、“ていっ！”と、踏み込んだ獣人の右膝を右前蹴りで砕き、そのまま右足を跳ね上げて無防備な顎を蹴りあげた。

驚いた獣人は、とっさに両腕で顎は守ったらしいが、蹴りの勢いで後方に跳ね飛ばされて、膝をついた。右腕がブラーンとしている。キモ！

更に僕は蹴り上げた足をそのままに、軸足をクルリと回転させて、後ろから姿勢を低くして短剣で突いてきたザコ獣人の脳天に叩き落とした。

ザコ獣人は、そのまま僕の右足と地面に挟まれ、動かなくなった。うむ・・・今度こそ死んじゃったか？

「てめえ・・・何もんだ？」

「間違いが一つ」

「何？」

「僕はこう見えても、男です！」

「・・・」

ノーコメントですか？折角、胸を張って宣言したのに・・・まあ良いでしよう。

僕は“次に襲ってきたら、本気でいきますからそのつもりで”といつも通りの小さな脅しを入れてから、地面に倒れた女性をおんぶして、また、歩き出した。

こう云っておくと、大概の不良はもう来ませんね。

そして、膝を砕かれた獣人さんはそのままの姿勢で、じつと僕達を見送ってくれた。

良い人だぁ・・・怪我、早く治ると良いですね。

「何はともあれ、第一村人？ゲットだぜ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4549z/>

異世界のバスストップ

2011年12月21日00時52分発行